

国立西洋美術館、世界遺産登録へ再挑戦！



6月開催の世界遺産委員会で登録の可否を待つ国立西洋美術館 写真：国立西洋美術館

6月、登録が実現すれば 都内初の世界文化遺産へ

台東区では、「国立西洋美術館を世界遺産に！」をスローガンに掲げ、官民連携による推進活動に取り組み、2011（平成23）年2月1日、関係国を代表してフランス政府からユネスコ世界遺産センターへ追加情報（改訂推薦書「ル・コルビュジエの建築作品―近代建築運動への顕著な貢献―」）が提出されました。

これにより、同年6月にバーレーン王国で開催される第35回世界遺産委員会で登録の可否について再審査されます。

今回提出した追加情報は、2009（平成21）年の第33回世界遺産委員会で「情報照会」と決議された指摘事項に添えるものです。今後、国際記念物遺跡会議（ICOMOS）による書類審査を経て、5月に勧告が示されます。

6月の世界遺産委員会で登録が実現すれば、東京都初めての世界文化遺産が誕生し、文化の薫る台東区の魅力がさらに高まることとなります。

追加情報（改訂推薦書）の主な変更点は次のとおり。

● 「顕著な普遍的価値」の証明を強化
近代建築運動と20世紀建築への顕著な貢献の点について、構成資産が世界遺産としてふさわしいものであることを証明するため、資料を示し、十分な説明を行いました。

● 国立西洋美術館については、「無限発展美術館」の構想を具現化した完成度の高い建築作品であり、その代表例であることを説明しました。

▼ 緩衝地帯の再検討
すべての構成資産の緩衝地帯について再検討を行い、必要に応じて改訂を行いました。

国立西洋美術館の緩衝地帯は、上野公園全域を範囲としており、法的な規制がかけられています。今回、景観分析を行い、景観が保全され、建物としての価値が守られていることを確認しました。

再審議に向けユネスコへ追加情報を提出



改訂推薦書

▼ 構成資産数の変更
世界遺産の評価基準を踏まえ、構成資産の再検討を行いました。その結果、フランスの「アック邸」と「救世軍難民院」、スイスの「シウオブ邸」の計3件を除外し、構成資産数を22件から19件に変更しました。

▼ 6力国自治体間の連携強化
「ル・コルビュジエ建築資産自治体協議会（Association des sites LE CORBUSIER）」を創設しました。

▼ 推薦書タイトルの変更
推薦書のタイトルを「ル・コルビュジエの建築と都市計画」から「ル・コルビュジエの建築作品―近代建築運動への顕著な貢献―」に変更しました。

世界遺産への道のり	
平成19年	9月 フランス政府（文化・コミュニケーション省）から日本政府へ共同推薦の依頼 国立西洋美術館（本館）を「世界遺産暫定一覧表」へ記載
	12月 国立西洋美術館（本館）を国の重要文化財（建造物）に指定
平成20年	1月 日本政府は「ル・コルビュジエの建築と都市計画」の世界遺産への推薦を決定
	2月 関係国を代表してフランス政府がユネスコ世界遺産センターへ推薦書「ル・コルビュジエの建築と都市計画」を提出
平成21年	10月 諮問機関・国際記念物遺跡会議（ICOMOS）による現地調査 【10月23日・24日】
	5月 ICOMOS勧告（「記載延期」とする勧告）【日本時間5月12日】
平成22年	6月 第33回世界遺産委員会（スペイン）で審査（「情報照会」とする決議）【日本時間6月27日】
	2月 関係国を代表してフランス政府がユネスコ世界遺産センターへ追加情報（改訂推薦書「ル・コルビュジエの建築作品」）を提出 【日本時間2月1日】
平成23年	5月 ICOMOS勧告（予定）
	6月 第35回世界遺産委員会（バーレーン）で再審査【期間：6月19日～29日】（予定）

第35回世界遺産委員会

2011（平成23）年の世界遺産委員会は、6月19日から29日の日程で中東のバーレーン王国で開催される予定です。

今回、国立西洋美術館を含む「ル・コルビュジエの建築作品」のほか、日本から推薦する「小笠原諸島」（東京都・自然遺産候補）と「平泉―仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群―」（岩手県・文化遺産候補）についても審議が行われます。登録が実現すれば、日本では、2007（平成19）年の「石見銀山遺跡と文化的景観」以来の世界遺産登録となります。

区長コメント



台東区は、歴史的な文化遺産や伝統芸能を大切に守り、未来へ確実に引き継いでいく進取の気風を持った文化都市です。

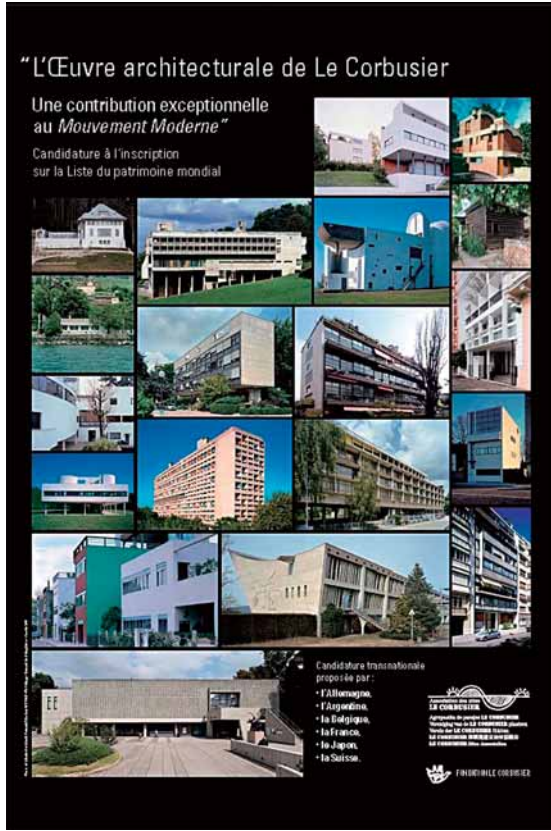
私は、国立西洋美術館の世界遺産登録をめざし、区を挙げて官民連携による推進活動に取り組んでまいりました。こうした取り組みは、文化の薫る台東区の魅力をさらに高め、この豊かなまちの発展につながるものと確信しております。

6月に開催される第35回世界遺産委員会まで3ヶ月余りとなりました。私は、世界的な建築家ル・コルビュジエが設計した国立西洋美術館が、ユネスコの「世界遺産一覧表」に登録されるよう、最大限の努力を傾注してまいります。どうぞ皆様のより一層のご理解、ご支援をお願い申し上げます。

台東区長 吉住 弘

「ル・コルビュジエの建築作品」
構成資産一覧 6カ国19資産

国名	資産名
フランス	① ラ・ロッシュ＝ジャンヌ邸
	② ペサックの集合住宅
	③ サヴォア邸
	④ スイス学生会館
	⑤ ナンジュセル・エ・コリ通りのアパート
	⑥ マルセイユのユニテ・ダビタシオン
	⑦ サン・ディエの工場
	⑧ ロンシャンの礼拝堂
	⑨ カップ・マルタンの小屋
	⑩ ジャウル邸
	⑪ ラ・トゥーレットの修道院
	⑫ フィルミニの建築物群
スイス	⑬ ジャンヌ邸
	⑭ レマン湖畔の小さな家
	⑮ イムブル・クラルテ
ベルギー	⑯ ギエット邸
ドイツ	⑰ ヴァイセンホフ・ジードルングの住宅
アルゼンチン	⑱ クルチェット邸
日本	⑲ 国立西洋美術館



協議会作成の啓発用ポスター（仏語版）

世界遺産登録をめざし、ル・コルビュジエの建築作品が所在する自治体が相互に連携するため、2010（平成22）年1月27日に設立された組織です。

台東区は、昨年秋に東京都と共に協議会に加盟しました。今後、パンフレットやポスターによる啓発活動やウェブサイトからの情報発信、イベント開催など、協議会による共同事業にも取り組んで行く予定です。

【協議会ホームページ】
<http://www.sites-le-corbusier.org/>

ル・コルビュジエ建築遺産
自治体協議会 (Association des sites LE CORBUSIER) につなぐ

国立西洋美術館 — 建物の特徴 —

- ・陸屋根、正方形の平面形状、らせん状の回廊、展示品の増加に伴い渦巻きのように増床できる平面計画など、「無限発展美術館」の構想を具現化した建物です。
- ・ピロティ、屋上庭園、スロープ、自然光を利用した照明ギャラリーなど、ル・コルビュジエによる特徴的な建築要素がとても良く表現されています。



「ル・コルビュジエの建築作品」
世界遺産としての価値

世界遺産に推薦している資産は、世界遺産の評価基準（※）のうち、(i)、(ii)、(iv)の観点から評価が可能となっています。

(i) 人間の創造的才能を表す傑作

ル・コルビュジエの建築作品は、造形面で革新的な表現形態をつくりあげ、建設的なフォルムに革命をもたらし、「近代建築運動」を牽引した彼の作品は欠くことのできない傑出した創造物です。

(ii) 建築、科学技術、記念碑、都市計画、景観設計の発展に重要な影響を与えた、ある期間にわたる価値観の交流又はある文化圏内での価値観の交流を示すもの

ル・コルビュジエの建築作品は、新しく、普遍的な建築だけが持つその美徳によって改革しようとする「近代建築運動」による理想像を今日に伝えている。

(iv) 歴史上の重要な段階を物語る建築物、その集合体、科学技術の集合体、あるいは景観を代表する顕著な見本

ル・コルビュジエの建築作品は、雑誌「レスプリ・ヌーヴオー」（新時代の精神）を具現化し、建築、絵画、彫刻が交差する総合芸術へと導くものです。それは、彼の著作や旅、講演を通じて世界中にもたらされた。

※「評価基準」は、世界遺産委員会が定める「世界遺産条約履行のための作業指針」に明示されている。登録には、一つ以上の基準を満たしていることが必要。なお、評価基準(i)、(ii)、(iv)の日本語表記は仮訳。

Le Corbusier 1887-1965

ル・コルビュジエの素顔

大成建設ギャラリー・タイセイ 学芸員 林 美佐



写真：国立西洋美術館

20世紀の建築の巨匠ル・コルビュジエは、しかし、「孤高の天才」といった称号が似合うような特別な人ではありませんでした。ただ、誰よりもものづくりに熱い情熱を注いだ人でした。彼は1887（明治20）年、スイスの山間の街ラ・ショー＝ド＝フォンに生まれました。この街は高級時計の生産地として知られ、ユネスコの世界遺産になっています。彼は地元の美術学校に通い、デッサンの先生の資格を取得しました。独学で学んだ建築の世界で偉大な足跡を残す一方で、絵画への情熱も生涯持ち続けました。

1917年、芸術の都パリに活動の場を移しますが、アカデミーの教育を受けていない彼にとって、そこは厳しい試練の場でした。辛うじて生計を立てながら、画家オザンファンとともにピカソの流れをくむ「ピュリスム（純

粋主義）」と名付けた芸術運動を展開し、総合芸術雑誌「レスプリ・ヌーヴオー」を発行。世の中へ発信し続けました。徐々に彼に共感した人々からの依頼を受けて住宅を手掛けるようになりますが、この時期の絵画作品にみられる幾何学的な構成や、薄板が重なるような空間表現、くすんだ淡い色彩は、いずれも彼の建築に直結する表現でした。

20年代末以降、絵画の傾向は大きく変わり、シュルレアリスティックな作品を描き、やがて、彼の夫人を連想させる豊満な女性を多く描くようになりますが、こうした人体や自然物への関心、柔らかくたっぷりとした形態表現も、彼の建築に反映されていきます。家具や車、女性のドレスのデザインまでも試みた彼の多才ぶりには驚きますが、さらに戦後になると、表現手段は多岐にわたります。それは彫刻、タピスリー、パピエ・コレ（紙の貼り混ぜ作品）、版画、エマイユ（エナメル画）等でした。一つの分野にとどまらず、創作し続けた彼のエネルギーには感嘆させられます。

美術の流れが抽象表現主義やオーバーオール絵画へとすすんでいく50年代にあって、象徴的なモチーフを多用した物語的な絵画へ向かった彼は、美術史上では特異なポジションにあった

と言えるでしょう。

この頃の美術作品は、造形的、色彩的に彼の建築と共通点があるだけでなく、壁に刻まれ、空間に置かれるなど、建築と直接結びつくものもありました。たとえば、国立西洋美術館の1階ホールは彼の写真壁画で覆い尽くされる計画でしたし、チャンディガール（インド）には「開いた手」のモニュメントが建てられました。彼は様々な分野での創作を建築という総合芸術に昇華させようとしていたのです。

彼は、1927年の国際連盟コンペで入選したものの採用されなかったとき、著書を通してフランスのアカデミーに宣戦布告を行ったほど表向きは戦闘的ですが、よく母の元を訪ねて甘えたり、1952年に竣工したマルセイユのユニテが数々の非難を浴びたときには、すっかりへこんで不安な思いを母親に切々と訴えたりしていました。家では夫人に顎で使われていたという証言もあります。そして、夫人と母親を相次いで亡くした時には、声を掛ける

のも憚られるほどの憔悴ぶりだったといえます。

自分は英雄であると信じ、苦境に立たされると自ら闘争心をかき立てながら独創的な建築を作り続けた彼の、隠れた素顔や詩的な世界は絵画を通して垣間見ることができます。また、建築では表現しきれない形や色の実験も、絵画や彫刻によって行われました。制約の多い社会的芸術ともいうべき建築に対して、絵画は感性を自由に表現できる手段であり、建築と絵画は彼の創作活動の両輪を成していたのでした。それだけでなく、「自分の建築は絵画という運河を通ってきた」という趣旨の発言からは、絵画が彼の建築の成り立ちに必要不可欠であったことが窺えます。

絵画も建築も、彼の創作活動の全てを担ったのは、彼の大きな分厚い手でした。彼は常に自らの手を動かし続けることによってあらゆるものを作り出しました。だからこそ、彼の作品からは温もりが感じられるのでしょうか。



マルセイユのユニテ・ダビタシオンのピロティ（フランス）



「開いた手」のモニュメント（インド・チャンディガール） 写真：丹下誠司